

お迎えまで

家元 愛珠

ある日、夕方に、私は犬の散歩をしていた。急にトイレに行きたくなり、近くにある公園のトイレに入った。急いでいて、電気をつけわすれた。すると、かつてに電気がつき、それと同時に人の足音。その足音は3番目に入っている私の所によってくる。ふいに足音が止まり電気が消えた。ほっとしたとたんに、

「ここだよ・・・」

天上から気持ちの悪い声でした。上を向くと首がもげてなくなっている体がのぼってくる。

大声をあげて、ドアを思いっきりおしつけ、飛び出した。が、出るちよくぜんに足をつかまれた。いそいで手をふりはらい外に飛び出した。すると犬が私の左足をなめた。見ると「迎えに行くね」という字が赤くはつきり書いてある。こわくなってそのまま病院に行った。

待合室には、私と七十才くらいのおばあさん、二人だけ・・・。

イスにこしをかけると、おばあさんもとなりにす

わってきた。おばあさんはこつちを見て、口がさけるくらいに笑った。

「ど・・・どうされました？」

すると、おばあさんは、気持ち悪い声で言った。

「迎えに来たよ・・・」

そこからのことは、あまり覚えていない。

待合室には、首がもぎとられた、血だらけの女だけが残された。

ああ・・・こんなことになるなら・・・トイレに
なんか行くくんじゃなかった。

おわり